

Olympic Flame and Torch Relay オリンピック聖火と聖火ランナー

近代オリンピックにおける聖火と聖火リレー

近代オリンピック大会で最初に灯火されたのは、1928年の第9回アムステルダム大会です。

その後、1936年の第11回ベルリン大会から聖火リレーが行われるようになりました。

聖火は、古代の儀式にのっとり、4年ごとにヘラ神殿正面で、巫女に扮した女性たちの手で太陽から採火され、主催地へとリレーで運ばれます。聖火リレーは、近代オリンピックに関する規約、「オリンピック憲章」に1952年から明文化され、今日のオリンピック大会まで引き継がれています。

聖火リレーのトーチ

	アテネ大会	北京大会	ロンドン大会
高さ	65.5cm	72cm	80cm
素材	オリーブ材 アルミニウム	ゴム アルミニウム	メタル アルミニウム
ランナー	約3,600人	約21,800人	約8,000人
最終ランナー	●●●●●	リ・ネイ	カルム・エアリー他 若者選手7名



聖火リレーのはじまり1936年第11回ベルリン大会

ベルリン大会組織委員会の事務総長をつとめたドイツの体育・スポーツ史家カール・デュームは、古代オリンピックで行われていた「たいまつ競争」をヒントに、聖火リレーを発案しました。オリンピアのヘラ神殿で採火された聖火は、複数の国を経てドイツに入り、開会式場の聖火台に点火されました。ところが、第二次世界大戦において、ナチス・ドイツはベルリン大会の聖火リレーのコースを辿り他国に攻め込みました。このナチス・ドイツによる「聖火リレーの戦争利用」は、戦後のIOCにおいては存続をめぐる議論を引き起こしました。ベルリン大会で感激を味わったという意見を重視し、聖火リレーは現在にも続く行事となりました。私たちは、このような歴史が聖火リレーにはあったことも忘れてはならないでしょう。



聖火の採火から消灯まで



聖火は、古代オリンピックの地、オリンピアの「ヘラ神殿」前で、太陽光線から金属製の凹面鏡で採火されます。



採火された聖火は、聖火リレーによって、オリンピック開催都市まで運ばれます。リレーにはスポーツ選手や有名人だけでなく、一般の人々もランナーとして参加しています。



聖火リレーによって開催地まで運ばれた聖火は、メイン会場に設置された聖火台に点火されます。聖火は、オリンピックの開催期間中灯され続け、閉会式の最後に消灯されます。

古代オリンピックにおけるたいまつ競争



壺に描かれた「たいまつ競争」

古代オリンピックでは、聖火リレーは徒競走部門の一種目として、太古から行われていたとみられています。また、宗教的な側面を持ち合わせた儀式性のある行事であったとも考えられています。

科学技術の進歩と聖火リレー



2000年シドニー大会



2008年北京大会※1



2014年ソチ冬季大会

1936年からはじまった聖火リレーは、科学技術の進歩にともない様々な方法がとられるようになり、また、その規模を大きくしてきました。例えば、2000年シドニー大会では、聖火はグレート・バリア・リーフの中を移動し、2008年北京大会では、聖火は世界最高峰のチョモランマ

(エベレスト)を登頂しました。また、2014年ソチ冬季大会では、国際宇宙ステーションでトーチのリレーが行われました。聖火リレーは、科学技術の進歩によって人間がどのように「火」を扱うことができるようになったのかを示す象徴だといえるかもしれません。

1964年東京大会の最終ランナー「平和と友情の祭典」と「核の平和利用」の象徴



東京大会の聖火は、ギリシャ・オリンピアのヘラ神殿前で採火された後、アジア主要部を巡り、10万人にも及ぶ人の手によって23,000キロの距離を移動し、東京まで運ばれました。最終ランナーに選ばれたのは、広島に原子爆弾が投下された1945年8月6日広島市郊外の生まれの早稲田大学学生であった、坂井義則氏でした。外国の新聞が彼を「アトミック・ボーイ」と称したように、大会の最終ランナーは、世界に「平和と反戦」のメッセージを伝えることになりました。このように戦後復興をめざした1964年東京大会時のように、東日本大震災からの復興をめざす2020年の大会の聖火リレーは、日本から夢と希望を発信するものになることが期待されています。

※1写真は、London Evening Standard 2008/5/8より引用
参考引用資料：国際オリンピック委員会ホームページ、日本オリンピック委員会ホームページ、日本オリンピックアカデミー編著(1981)『オリンピック辞典』、日本オリンピックアカデミー(2008)『ポケット版 オリンピック辞典』、梶見千鶴子(2004)『ギリシアの古代オリンピック』創文企画(2014)『現代スポーツ評論30』、Olympic Museum Lausanne(1993)『OLYMPISM IN ANTIQUITY』他
和田 拓也(中央大学大学院、JOA広報委員)作成